



九頭竜湖

1997年10月23日、私は仕事で福井県武生にいた。勤めている会社の工場が武生駅の近くにあってその中の研究所で午後1時過ぎから4時過ぎまで特許関連の会議に出席したのであった。その日のうちに東京に帰れる出張であったが、翌日は休暇をとっており、その夜は福井に泊り翌朝福井駅から出ている越美北線で終点駅九頭竜湖（くずりゅうこ）まで足をのぼしてみることにしていた。私の持っていた北陸ワイド周遊券は九頭竜湖まで周遊区間に含んでいたのだから切符を買う必要もなかった。

九頭竜湖には7月にも行ったばかりであった。しかし湖まで行ったわけではない。その折りは午後4時頃福井駅で越美北線の電車に飛び乗って九頭竜湖駅までは行ったが、ダム湖に行くには時間が足らなかった。そこで駅の近くを流れる九頭竜川の土手を歩いたり、駅の裏にあった「青葉の笛」資料館、穴馬民族館、郷土資料館を見学し、夕暮れには笛資料館の横の広場で持参していたリコーダーを吹いて過ごした。そこには笛を祭る小さな新築の神社があり、得意の曲を奉納演奏したわけだ。その夜は越前大野までは電車で戻れたが、そこからは電車でもバスでも福井まで戻ることができず、越前大野のビジネスホテルに泊まった。

だから今回は福井で一泊し朝早めの電車に乗って午前中に九頭竜湖駅に着いてレンタル自転車で九頭竜湖に向かう予定にしていた。

九頭竜の湖にぜひ行ってみたいと思うようになったのは、前回来たときに、知人で越前大野出身の歌手尾野玲子（おのれいこ）女史が「私が幼い頃遊んでいた思い出の場所が全部水に沈んでしまったのよ」と生まれ故郷の村がダム建設のために水没したことを話していたことを思い出して、そのダムが九頭竜ダムに違いないと思うようになったからだ。

彼女は私に少女時代の頃のことを幾度か語ってくれた。両親は崇高な夢を抱いた教師であった。彼らは若くして過疎地の学校を志願し福井県の山奥の小学校を任地とした。教室は一つしかなく1年生から6年生までが一緒に教えられる。玲子さんはその寒村で育った。そして姉とともに野山を駆け巡ってウサギやリスを追い、山びこの響く谷間で歌声を張り上げ、自由と自然に恵ま

れて野生動物のようにすくすくと成長した。しかし彼女がまだ小学生の時、わが家のように親しんだ学校が廃校になることとなった。ダム建設のために学校のあった谷がダム湖と化すことになったからだ。両親は大野に転勤することとなった。こうして夢のようだった野性時代は終わり、彼女にとっては都会だった大野市に住むこととなった。そして日本人ばなれした彫りの深い美しい容貌を持つ彼女は都市のほうが似合う乙女に育っていった。両親の励ましもあって歌唱力に磨きをかけ、小学6年生の時に出場したコンクールでウエルナーの「野ばら」を歌って優勝し歌手になることを決意。やがて関西のある音楽短大に進むことになる。

このような話を聞かされながら私は彼女の育ったところ、とくに今はダム湖となった野山を思い描いた。そしていつかその山奥の地を訪ねてみたいものだと思うようになった。

彼女とはもう4年間会っていないが、会っていた頃には大野では母親が一人暮らしをしている言っていた。父親はもうずっと前に他界している。そして彼女は暇あるたびに大野へ帰省しており、ある時、いつか自分の乗った電車が武生あたりを通過していると窓から私の会社のロゴマークのある工場を見つけたと言っていた。もしかして今も彼女は武生を通過する列車の窓からそのマークを見るつかの間、私を思い出してくれているのだろうか。

彼女と初めて会ったのはもう10年近く前になる。赤坂の溜池交差点の近くにベルマンズポルカというドイツ風ビアホールがあった。歩道からすぐ地下に降りる階段がありこれを下っていると下から陽気な音楽が聞こえてくる。そしてソプラノのよく通る女声もそれに混じって聞こえる。多くの場合それが尾野玲子の声である。私が最初にそこに行ったのは7、8年前のクリスマスのしばらく前のことで会社の友達に誘われて三人で行った。ステージの近くに男性が一人だけ座っているテーブルがあり、その人の許可を得て相席することとなった。そして私がまず目を魅かれたのは、低いステージの端の椅子に足を揃えて座って鉛筆でしきりに楽譜らしい紙に書き込みをしていた女性であった。それが初めて見る尾野玲子であった。私はその気品のある容姿に心を奪われテーブルでの会話も上の空で何度もそちらに視線を回し彼女を盗み見た。

彼女は赤のブレーザーを着ておりクリスマスの曲をたくさん歌った。私は低いステージ上の彼女の迫力ある歌声に聞きほれ、リズムに乗ってスウィングする豊かな身体に見とれ、万華鏡のように次々と繰り出される彼女の美しい表情に魅了された。

私たちは相席した人と打ち解け合い、彼は尾形光琳の末裔であると言い、名刺を見ると姓名の最初の三つの漢字は光琳のと同じだった。この人は尾野玲子と親しく、彼女のステージが終わると彼女が好むジュースを注文し、彼女を席に呼んだ。私たちは自己紹介し合い、他愛のないしかし楽しい会話をした。彼女は私の持っていた小さな歌詞の本に自分の名前をサインし、「またおいで下さい」と書いた。そして次回からは彼女は私を見つけるとテーブルに来てくれるようになり、私は月に一二回はベルマンズポルカに行くようになった。しかしひとりで行くことはほとんどなくさまざまな友を同伴して行った。外人をもてなすときもたいていここを選んだ。よく一緒に行ったのが会社の同僚の関川氏と堀内氏だ。彼らとは彼女が年一回行っていたコンサートにもいつも一緒に行った。堀内氏は尾野玲子の歌う「カタリ」を特に気に入り、それをよくリクエストした。その曲は彼が青年時代に参加した合唱団で猛練習した曲で彼の青春のテーマ曲ともいうべきものだったのだ。

ある時、ベルマンズポルカで私の席にやってきた尾野玲子は、その頃放映された日本のビジネスマンの実態を扱ったテレビ番組に言及して「ビジネスマンは毎日命をすり減らす思いでお客さんの接待をしなければならず大変ですわね」と憐憫の思いを表してくれた。そこで私はすかさず「でも、あなたのような美しい方を接待できるのでしたら命がいくらずり減ってもいいのですが」と言うと、彼女もすかさず「あら、私を接待するのは命がけですよ、命がいくつあっても足りませんよ」と笑った。

またある時彼女は、私が彼女の美しさを称賛したとき「長光さんは日本人ばなれして、お世辞がお上手なのだから」と言ったことがあった。私は口下手だが、確かに彼女の前では人が変わったようにすらすらと彼女を称賛することができた。その数日後のコンサートのステージで彼女は「女は男に美しさを褒められれば褒められるほどもっともっと美しくなってゆくので、どんどん褒めてくださいね」と言った。私は彼女をヒロインにしたフィクションを書くことにした。その中で彼女の美しさの描写を極めようと試みた。結局二編の短編小説を書き彼女に献呈した。二作目の「カデンツァ」は自分では最も満足しているフィクション作品だ。そしてこれを最後にフィクションを書くことをやめることにした。自分がこの世に男子として生を受けて遭遇した最も美しい女性に自分の最高の創作品を献じたのだから。

さて、武生工場での仕事が終わると私は武生駅に早足でゆき、入ってきた特急列車にかろうじて間に合った。しかし自由席車両は混んでいてすわれそうにはなかった。すると前に見慣れた後ろ姿の男性が歩いているのに気づいた。彼はドアのすぐそばの席に座ることができた。私は彼を通り過ぎて振り返り、その人が確かに知人であることを確かめて「こんにちは」と声をかけた。するとその男性は「やあ」と返した。久しぶりに会う先輩堀内氏であった。そういえば彼は2年

前に北陸営業所の所長として福井に転勤になっていたのだ。彼は武生工場でのある会議に出ての帰りだった。私たちは福井までの約10分の乗車時間の間にかつての思い出を語り合い、もちろん尾野玲子のことが最初の話題になった。

「そういえば、長光さんによく連れていってもらったね、あのビアホール。今でも彼女は元気に歌ってますか」

「もう4年くらい彼女には会っていません。ベルマンズポルカは去年店じまいしました。噂では彼女は都内のあるホテルでディナーショーに時々出ているらしいです。」

私は彼に誘われて北陸営業所に行った。福井駅から歩いて2分くらいのところだった。十数名の所員が忙しそうにしていた。所長の堀内氏も一日事務所をあけていたので要処理の仕事がたくさんあって、私にかまっていられなかった。

6時が過ぎると堀内氏は仕事を打ち切り私と社を出た。そして駅前の行きつけの焼き鳥屋に入り、再び思い出話に花を咲かせる。

私は、7月に越前大野と九頭竜湖駅に行ったこと、そして翌日は九頭竜湖に再度行くつもりであることを彼に話した。しばらくすると彼の事務所から三人の男性がやってきて私らに合流した。島本、広沢、玉村の三氏だ。私は持参していたケーナを取り出し、あすは九頭竜湖の笛の神社でこれで奉納演奏をしますのでとって「コンドルは飛んで行く」を吹いてみた。店内はしばらく静かになった。しかし酒のせいが高い音を出すのに苦労して演奏は不出来だった。

島本氏が私に今夜の宿はどうするのかと聞くので、サウナに泊まることにしていると言った。すると広沢氏が、福井市には2つサウナがあり一つはやーさんのたまり場でもう一つはホモさんのたまり場だと言った。私は広沢氏の注意事項を比べ後者に泊まることにした。玉村氏は大野に在住で9時前に最終列車に乗るため席をたった。彼によると九頭竜湖行きの始発列車は福井を9時3分に出るとのことだった。そして九頭竜湖に行くなら「夢の掛け橋」はぜひ見てきてくださいと言った。これは四国大橋の設計のためのプロトタイプとなった吊橋だという。

私らも9時をあまり回らないうちに店を出た。私と堀内氏とはくだんのサウナのある町の方向に歩いた。彼が単身で住むアパートもその方向だった。彼は自分のアパートに泊まるよう勧めてくれたが辞退した。やがて私らは別れた。私は酔いが収まらず、サウナを通過して酔いざましにさらに歩いた。迷子にならないために道はまっすぐ行った。10分余り歩くと公園があったのでここで休むことにしコンクリートの小山に登った。てっぺんに腰掛けられる石があったのでこれ

にすわり、ケーナを取り出して「コンドルは飛んで行く」を再び吹いた。

こんどはうまくいった。酔いもだいぶ覚めてきたようだ。しかし近所の犬が吠え出した。私は犬をなだめるべく口笛を吹く。すると吠え声はやんだ。もうひとしきり「コンドルは飛んで行く」を演奏した後、くだんの犬に静かに聞いてくれたことのお礼がしたくなり、声のしたほうに口笛を吹きながら歩いた。しかし犬は音も立てず自分の居場所を私に知らせようとはしなかった。私がまだ酔っていることを察知して警戒したに違いなかった。

道に戻ってサウナに入った。サウナではいつもそうすることだが、30分後にマッサージを予約して風呂に入った。ここにはサウナ室が2つあり一つはマイルドな温度であったので、私はこちらで寝そべってしばらくテレビを見た。ここはなかなか快適で、壁の説明書きを読むとマイルドなサウナは安眠を促すとのことだった。そして私はそのままそこで眠りに落ちてしまい、気がつくところだじゅう汗だらけで、マッサージの時間まであと5分足らずとなっていた。

マッサージ室に行くと、極度の近眼なのであろう、男性のマッサージ師がブラウン管に眼鏡をこすりつけるようにしてテレビを見ていた。しかし彼の腕はよかった。そのせいか、それともマイルドサウナのせいか、程なく私はまた快い眠りに落ちた。マッサージが終わると私は夢遊病者のようにふらふらと簡易ベッドのある広間に行き一番奥のベッドに横たわった。

私の眠りは浅かったのか、いつしか自分はまだマッサージを受けているのだと思っている。そして確かに体が揉まれているという意識があった。しかし揉まれているのがマッサージではありえないところだと気づいたときに目が醒め、顔にかけていたタオルを取った。すると揉み手はすっと離れた。あたりの様子を見たが薄闇の中に動く人影はもうなかった。それにしてもこの闇のマッサージ師の手付きも優れていた。私は憤りを覚えるどころかそのテクニックに称賛の気持ちさえ覚えた。そうかこれが広沢氏が注意するようにと言っていたことか、と夕べのことを思い出した。

寝ぼけまなこでベッド室から出てみるとまだ3時前だった。再び風呂に入ってシャンプーをし髭を剃った。サウナがホテルより好ましいのはいつでも熱い風呂に入れることだ。簡易ベッドのある広間に戻ると、ひとりが大きないびきをかいていたので、ここはあきらめ、念のためにロッカーに行って耳栓とアイマスクを持参してテレビ室のリクライニングシートで寝た。

翌朝、歩いて駅に向かう。途中ロング缶のオレンジジュースを自動販売機で買い、バスターミナルに立ち寄り、そこにあったベーカリーでパンを買い朝食。このとき買った一袋のパンが結局一日分の食料となる。福井駅につくと9時3分発の九頭竜湖行き電車に乗る。プラットフォームに並んでいた中学生の遠足団が乗ってきて満員になる。隣に座っていた女性と私の前に立っていた引率の若い男性教師がかつての同僚のようで、久しぶりに会ったの会話に打ち解ける。私は生徒や教師に囲まれて、振り向いて風景を楽しむ余裕もなし。持参していた論理学入門書を読む。結

局遠足団は越前大野まで同乗。

大野からは車両が一両だけとなり乗客もずっと減る。車窓の風景を楽しむ。途中九頭竜湖に近づくと長いトンネルに入る。通過するのに7分かかり、入り口と出口の標高差は百余メートルである。これは前回来たときに若い女性ガイドが車内アナウンスで教えてくれた。この女性は九頭竜湖駅の駅長である。しかし九頭竜湖には住んでおらず、大野か福井から通っている。そして通勤中は沿線のガイドをしてくれる。新たに乗客が乗ってくると一両編成の車両の中を彼女は「こんにちは、九頭竜行きです。こんにちは、九頭竜行きです」と案内して歩く。制服の似合う竹のような足をした清純そうな女性であった。今回も期待していたがこの福井始発の電車には乗っていなかった。

九頭竜湖駅に到着すると駅の売店の婦人が出てきて降車客に九頭竜湖に行くバスがすぐ出ることを案内している。よく聞くと25分でここに戻ってこれるとのこと。こちらはもっとゆっくりしたいので彼女にレンタルサイクルはあるかと問えば、あるというのでそれを借りることとする。彼女は客をバス停まで案内したり、レンタルサイクルの用意をしたり一人でてんてこまいだ。「ダムまでの上りは急ですよ」などと彼女は脅すがかまわないと言って借りる手続きをした。サイクリングによるツーリングをやめて数年がたつがまだ足には自信はあった。駅を出て右方に観光案内センターの機能を持つ「ふれあい会館」があり、ここで彼女は受け付けをしてくれ自転車を用意してくれた。料金は後払いということだった。自転車は四段ギアのもので、たしかにここで自転車を借りる人は九頭竜湖へ行くに決まっており、九頭竜湖に行くには長い坂道を登らねばならず、したがってギア付きであることは肝要だった。

福井行きの最終電車の発車時刻「16時34分」をもらった地図にメモすると、背に愛用の皮製バックパックを負って出発した。国道158号線に行く。近道の急坂を登ると汗が吹き出した。そこで私は背広を脱いでハンドルに付けられたバスケットに入れた。10月下旬とはいえ天気がよいので晩夏の暖かさだ。

やがて鷲ダムに至る。ダムの上を歩いてみたかったが立入禁止だった。ここでひと休みしてケーナを吹くと対岸のダム側壁に響いてこだまが返ってくる。心地よいエコーがきいて曲に情緒が加わる。自分の吹く音よりも返ってくる音のほうが澄んで聞こえる。エコーが音を浄化するのであろうか。ここが気に入る「コンドルは飛んで行く」などを数曲奏でる。階段があったのでダム湖の水辺に降りてゆくと鮎かと思われる魚が数尾泳いでいた。

次に停車したのは魚の慰霊塔があるところだ。小丘に上ると九頭竜川と漁業の歴史が石碑に刻まれていた。魚の霊を慰めるべく石碑と木立の陰でケーナを吹いた。

そこを発つとしばらくヘアピン状の坂が繰り返し、やがて壮大な九頭竜ダムが見えてくる。地

図によるとそこは九頭竜湖駅より約6キロである。このダムは米国で開発されたロックフィル式だ。地元の山を崩して岩を採り、これを集めてダムの堰としたのだ。内部は砂利や粘土質の部分もある。高さは128メートルで急き立った断崖という感じではなく、火山の斜面のような印象がある。国道近くの堰の一面がすすきが原となっていた。通例のダムのように傾斜は急でなく、歩いて下に降りてゆけそうだった。丘の上に立っているようで高所恐怖症の者でもこのダムでは鳥肌が立つことはなからう。

武生での会議で会った登山友達の石田氏はかつて九頭竜湖に車で来たことがあり、そのときの記憶では、このダムは一旦放流した水をポンプで汲み上げているという。それを聞いたときこれは不合理なことだと思った。ある量の水を汲み上げるのに要する電力は同じ量の水で発電できる電力量よりはるかに大きいからだ。省エネの時代に大きな無駄がなされていることとなる。石田氏もそう言われてみれば確かにおかしい、自分の説明書きの読み違いであったかも知れないと言った。しかし石田氏の記憶は間違っていなかった。この一見不合理な方式を合理化する理由があった。

電力需要は昼間にピークになり、これをまかなうために日本中の発電所がフルスウィングで発電する。しかし夜間は消費電力量が減ってすべての発電所が稼働する必要はなく、火力発電所の発電量で十分である。そこで九頭竜湖ダムでは昼間に放流した水を下流の調整ダムである鷺ダム湖に貯溜しておき、夜間に火力発電の余剰電力を借りて汲み上げて、翌日の電力消費ピーク時に備えるのだ。このようなダムを揚水式という。これは人間でいえば喰いだめに似ていないこともない。

九頭竜湖の堰の国道側に公園があり、ここにはダム関係の情報を説明するための小展示館があり、入り口でパンフレットとタオルをくれる。このタオルには九つの頭を持つイメージキャラクターのクリュウ君が描かれている。中の広間でダムを建設するまでのビデオの放映があり、その中の映像で私の注意を引いたのは、学校が廃校になることを記す掲示板と小学校の校庭のブランコだ。このブランコに乗って少女玲子は笑顔ではしゃいだことがあったに違いない。しかしそのブランコも今は湖底で揺れることもない。

私はビデオが終わるとダムの堰を自転車で渡った。すると反対側に登山口を示す標識があった。自転車を鍵をかけておいてその山道を登ることにした。上は展望がいいに違いなかった。どんぐりが音を立てて落ちている。20分くらい登ったときに道は少々下った。私はその先の登りを前にして歩を止める。高い木々のせいでいくら登っても望んでいた展望にはありつけそうになかった。汗だくになっていたので、上半身裸になりYシャツやシャツを枯れ木にかけて干した。そして先ほどもらったクリュウ君のタオルで身体を拭いた。しばらくは風が心地よい。そして思いついたことを手帳にしたためた。

玲子よ、九頭竜湖の水が君の思い出の村を沈めたように、私は「カデンツァ」の中に君への思いを沈めようとした・・・

ケーナと楽譜を取り出し、葉の散った枝を譜面台にして南米の音楽を奏でた。風が落ち葉を運んできては譜面の上に落とす。そこで私は譜面から離れて即興演奏をする。すると大きな蠅が寄ってきてうるさく顔のあたりを飛び回る。

山道を下ると自転車で再び国道158号に戻った。トンネルを避けて迂回道に行く。すると崖崩れのあとがあった。風景のよいところで自転車を止めてパンとジュースの昼食にする。朝買ったパンはまだ残っていた。全力で発電中なのか広大なダム湖の水かさはずいぶん低くなっており、道から湖面には急な崖が露出している。水量が多ければこの崖もおおかた水面下になり道べりを自転車で走っても不安を抱かせないのだろうが、今は地層の線が異様にあらわになった急斜面が水面に落ちて少々グランドキャニオンを彷彿とさせる光景が続く。

私は目的地を「夢のかけはし」と決めていた。これは前述のように四国大橋の設計参考のための小型モデルとなったサスペンション式の橋だ。九頭竜湖駅より14キロのところにある。

着いてみると、特に美しい橋というべきものでもなかったが、紅葉の山肌が迫っていて、しばらくは橋とのコントラストの美しさを鑑賞した。

橋を渡っていると、対岸側に車椅子に座っている老人男性が三人おりそばに付き添いの看護婦や看護夫らしい男女がこちらを向いていた。病院か養老院から入院者にいい空気を吸ってもらうために車でここにくるのであろう。私が近づくと「こんにちわ」と女性が挨拶したので、こちらでも挨拶を返した。橋を渡ったところで自転車を置いて、徒歩で道を右の方向に行った。しばらくゆくとバックパックからケーナを取り出して歩きながら吹いた。ここはこだまがあまり響かなかった。

橋に引き返すと、さきほどの人たちがまだいて、看護婦が「コンドルをリクエストします」と言った。私は憶せずバックパックから譜面を取り出して全曲を吹いた。拍手をもらうほどうまくはいかなかったが、観客は拍手を惜しまず、それは何という笛かとか、どこの国の笛か、などと質問した。私は自転車で乗って質問に答えながら橋を渡った。私もやがて音楽で人を和ませることができるようになれそうな気がした。

帰りは下りが主だったので来るときほど道のりを感じなかった。景色のよいところ数カ所で止まってケーナを吹いた。徒歩旅行では歩きながら吹けるが、自転車の場合は休憩するときにしか吹けない。最後に再び鷺ダムのとほりでエコーを楽しむ演奏をした。

九頭竜湖駅に戻ってもすぐには自転車を返さなかった。駅の裏の笛神社に行った。神社といってもできたばかりのもので、上に鋭角の吹き通しのルーフがありモニュメントのような印象を与える。このルーフの下に入って笛を吹くとルーフの効果で反響が得られる。ケーナをもってそこにゆき「コンドルは飛んで行く」を奉納演奏した。

今回は横笛の材料となる篠竹を得ることも考えて、のこ付きのスイス・アーミーナイフを持参していたが、それらしい竹には巡り合えなかった。笛神社を含む駅裏公園には種々の竹が植えられていて、それぞれの種ごとに解説の札も立てていたが篠竹はなかった。自分の愛用しているケーナは篠竹製である。

九頭竜湖駅の民芸品コーナーにはこの地にゆかりの横笛が二本陳列されている。言い伝えによると京よりこの地に来た平家の若武者が村の娘と恋に落ち娘は子を孕む。若武者は父の危急を知り京に戻らねばなくなり、娘に笛を与え、もし生まれる子供が男であれば、自分を継ぐ武将にするので京に自分を訪ねてこさせるように、もし女子であったらこの笛を与えて村で平和に暮らさせるようにと言った。生まれたのは美しい女の子であった。若武者は父の仇を討てず帰り討ちにあって死ぬ。彼の残した笛は今も保存されているらしく、そのレプリカは、笛神社のそばのこれもできたばかりの青葉の笛資料館の中で見ることができる。ふち果てて原形をとどめていない。のちに東京でこのレプリカの製作者田中敏長氏に会うことがあり、話を聞くと、まず正しく笛を造りそれから壊していったとのこと。

この青葉の笛資料館に土曜日か日曜日に行くと、笛造りの講習会があり自分でも一本造ることができる。私は最近笛造りを趣味の一つに加えたが、この発端は7月にここを訪ねたことに関係がありそうだ。その時は笛造りの講習会はなかったが、神社でリコーダーの演奏をしたとき笛の精が私にのりうつって笛を造るようにそそのかしたのかも知れない。数日後、夢で私は苦心しながらケーナの吹き口を刃物で削っていた。

自転車を返すためにふれあい会館に行くと、受付に女性駅長がいた。駅長であっても列車の本数が少ないのでたいていはこちらにいて観光の案内や宿泊予約等の仕事をしているらしい。「11時から4時までですね」と言い、首をたてに振りながら指を折って使用時間を確かめる様子がチャーミングであった。1時間200円で、私は800円払った。（彼女も私も計算間違いに気づかなかった。）すると彼女は私をくりっとした目で見つめて「記念品をさしあげます」と言い、少女好みのするような布袋を差し出した。これは香りのいいハーブの芽などを入れた袋で赤いリボンで口が結ばれていた。「もむとすぐにいい匂いがしてきますよ」と彼女が言ったので

袋を揉むとちくりととげがさして痛みが指を襲った。しかしたしかに心地よい匂いがする。「どうもありがとう」と私が言うと、彼女はちょこんとおじぎをしてすぐに駅に走って行った。折り返して福井駅まで戻る最終電車が到着したのだ。

私は匂い袋を嗅ぎながらすがすがしい気持ちでふれあい会館の中を見て回った。天井から吊された木製の鳥のデコイを指ではじいてスウィングさせた。奥にビデオ鑑賞室があり、のぞくとちよほど九頭竜湖ダムに関するものが映されていた。古いフィルムからの編集で白黒映像であった。九頭竜川添いの村から立ち退きを迫られる人々と北陸電力との間で和解が成立した場面につき、学校や村の引っ越しの様子が映し出された。私はそこに少女玲子の姿があるのではなかろうかと目を凝らした。

おわり

ひとつよく思い出す彼女との会話がある。

「私が幼い頃遊んでいた思い出の場所が全部水に沈んでしまったのよ」

「でも尾野さんが沈まなくて良かったね」

「アハハ、おもしろいことをおっしゃるのね。…ええどうせ私は沈もうにも太り過ぎていて沈まないと言いたいんでしょう」彼女は私の肩を平手で叩いた。

<http://onoreiko.com/?cid=5>

「カデンツァ」の章：<http://p.booklog.jp/book/121273/read>

写真 photos:

[amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro](https://www.amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro)